

英メディアがロシアについて間違いを認め始める

August 11, 2014

Bryan MacDonald (RT)

(ブライアン・マクドナルドは、ジャーナリスト、作家、テレビキャスター、教師。Irish Independence や Daily Mail に執筆、RT のほかに RTE やアイルランドの Newstalk にしばしば出演している。)



ウクライナ兵士が軍装甲車に坐っている、2014年8月9日、ドネツクにて。

カトリック教の特に人を引き付ける特徴の一つは告白（告解）である。これはローマの目から見れば、どんなに深い罪でも、ひとたび信者が司教から罪の許しを受けたなら、どんな過ちや犯罪も帳消しにされることを意味する。

メディアにも同じようなことがある。ただその場合、それは“*mea culpa*”（“私の間違いでした”というラテン語）文化として知られる。基本的にメディアは、全くのでたらめを、いくらでも印刷したり放送したりできるが、ただ後で、両手をあげて「私たちの間違いでした」と言わねばならない。そのよい例は、ニューヨーク・タイムズがサダム・フセインの、存在しない“大量破壊兵器”を報道したケースである。

2002年の夏ごろから2003年の同じ頃まで、ニューヨークの新聞は、あの死亡したイラクのリーダーが、そのような恐ろしい倉庫一杯の兵器を持っているという印象を与え続けた。実際、読者はフセインが、マイクロ化学兵器をポケットに入れて持ち歩いていると思ったであろう。情報攪乱の奔流というものはそんな効果をもつ。もちろん後になって、彼は、マイ

クロだろうが何だろうが、どこにもそんなものを持っていなかったことが分かった。また彼は、2001年9月のニューヨーク攻撃に何の関係もなかった。にもかかわらずアメリカ人の70%は、メディアのウソに完全に騙されて、そうと信じた。

これは、NY タイムズという新聞が真理の機関と受け止められ、その大嘘に後押しされて、ジョージ・W・ブッシュ大統領が完全にウソの口実によって、アメリカを戦争に引き込んだことを考えれば、明らかに非常に危険なでたらめだった。悲しいことに、あの紛争の反響が今日再び聞かれる。あの不幸な国が恐ろしい内戦へと導かれ、オバマ大統領は、彼にしかできない、うろたえ方を見せている。

2004年7月、NY タイムズは卑屈なお詫びを掲載し、後に責任者の記者と袂を分かった。これは、その時すでにイラクの新しい支配者に拘束されていたサダムにとっては、少々遅かった。また、この不法な戦争で暴力死を遂げた何十万という人々にとってもそうだった。

ロシアもまた、アメリカと EU がウクライナの必要のない内戦に火をつけて以来、西側の多くの主流新聞の、同じような悪者作りと虚報によって被害を受けている。私はすでに前の特報記事で、英国のメディアが、あの恐ろしいMH17の惨劇の数時間後に、いかにプーチン大統領を告発し、裁き、宣告したかを報告した。“プーチンのミサイル”という大見出しで、ロンドンの **The Sun** という新聞法廷は即刻、宣告を下した。証拠がないということなど、お構いなしだった。実は一か月近くたった今も、反乱軍——いわんやクレムリン——をこの悲劇に結び付ける、ひとかけらの証拠もない。しかしイギリスの新聞が、ガザの残虐を報ずるときに“オバマのミサイル”という見出しをつけるのを、息を殺して待っても無駄だろう——アメリカがイスラエルに武器供与をしている明らかな事実にもかかわらず。

メディアが間違ったとき、彼らが *mea culpa* を発表するまでに、通常、数年（ときには数十年）は待たねばならない。しかしどうやら、イギリスのメディアは、今週、自分たちがウクライナで間違った馬を支持していたことに気づき始め、早々にお詫びモードに入っている。ここではっきりさせておこう。外国事情についてイギリスの政治的見解を形成している3つの新聞は、**The Daily Mail**, **The Daily Telegraph**, **The (Sunday および daily) Times** である。「ザ・サン」は国内問題では大きな役割を演ずるが、国外問題ではそれほどでない。



ウクライナ軍によるドネツク爆撃で破壊された総合病院

今週末、「ザ・テレグラフ」（効果的にも、与党・保守党の党内新聞）は、EU がキエフのマイダン広場での抗議デモ隊に、日当を払っていたことを認めた。これはロシアが、ウクライナの分裂のもう一方の側の抗議者に報酬を支払っていたという、それ以前の英メディアの宣伝とひどく衝突する。正直に言うと、これを始めて読んだとき、私は食べていたものを吹き出したのだが、この新しいスタンスがどちらへ向かうものであるか、私にははっきり分かる——*Mea culpa*（私が間違っていた）が急展開で全体を先導し始めている。

「これまでほとんど報道されてこなかったことは、西側が多少とも密かにウクライナにつぎ込んできた何十億というドルやユーロのことである。これは、ウクライナの破産した政府や銀行を支えるというだけでなく、何十という怪しげな、EU が“市民社会”を構成しているという、“親ヨーロッパ・グループ”を資金援助するためである。」

「私の読者の一人が、イギリスで働いているウクライナ女性から聞いた話だが、彼女の夫は本国で電気工として働いて、月に 200 ユーロ稼いでいるが、ドイツの銀行から別に 200 ユーロもらっている。それは去年の 3 月のようなデモに参加する報酬だという。このデモには何万という群衆が——その多くは間違いなく完全に誠実な人々だが——キエフへ繰り出し、そのとき訪問していた EU の“外相”キャサリン・アシュトンに向かって、“ヨーロッパ、ヨーロッパ”と連呼していた」と、コラムニストの Christopher Booker は書いている。

ブッカーは続けてこう言っている、「すべてわかるように EU の星のついた、学校や保育所の再建、スクール・バスの提供、医療費の支払い、農作物保管施設の再建——こういったも

のを与えられたあとで、EUとの強い関係に反対の投票をする者が一人でもいたら、不思議である。」

もちろん英メディアのあるものは、極端に反EUであり、彼らが理由のいかんにかかわらず、ブリュッセルの一枚岩を攻撃するのは当然であり、納得のいくことである。しかし全体的傾向として見て取れるのは、早期のウクライナ内戦のときの耳障りなウクライナ支持の調子が、いつか大いに謝罪をしなければならなくなることを悟って、急激に弱まったことである。

これはイギリスだけではない。ドイツの代表的なビジネス新聞 Handelsblatt もまた、この週末、隊列を乱して、主筆の Gabor Steingart とともに、「西側の気違い沙汰」という見出しで、ウクライナにおける NATO/EU のポリシーへの驚くばかりの攻撃を開始した。

NATO の新聞によって、ロシアが人食い鬼のように扱われていることについて、彼はこう警告する、「経済的圧力と政治的孤立化がロシアを跪かせるだろうという考え自体が、実はきちんと考え抜かれたものではなかった。たとえ我々が成功したとしても、ロシアが跪いて何の利益になるのか？」

「自分たちの選んだ指導者が貧民のように扱われ、その市民をこの冬には我々が支えなければならない、屈辱にまみれた人々と、ヨーロッパの一つ屋根の下で一緒に住みたいと誰が思うだろうか？」

現在のエスカレーションがドイツの利益を損なうことを強調して、シュタインガルトはこう続ける、「制裁を受けた国家が自分の振舞いを謝罪して、その後従順になったという歴史上の例はない。それどころか、制裁を受けた者を支持して集団的な運動が始まる。現在のロシアがまさにそうだ。

「この国がこの大統領を押し立てて、今ほど強く結束したことはない。これはほとんど、西側の烏合の衆をけしかけた者たちが、ロシアの秘密警察のリストに載ることさえ、考えざるを得ないような事態だ」と彼は付け加えた。

私は「烏合の衆をけしかけた者」がロシアのスパイだとは思わない。またそれがアメリカやイギリスの代理国だとも思わない。それは“悪者”を探し求める、メディアの支配者たちであり、ビン・ラディンもサダムもいなかったもので、ロシアが今のところ、その役にぴったりだったというに過ぎない。

この狂気の沙汰の中ではまた、先般、ソ連が死に際に咳をしていたとき、つかの間の日の目を見た、年老いた“冷戦解説者”(Cold Warriors)の再登場もある。何年も無視された後で、彼らは戻ってきて(一時的な)寵児となり、どれほど馬鹿げた時代錯誤にとらわれていようと、自分の声を聞かそうと決意している。実際、1980年代にアフガニスタンのムジャヒディン(聖戦士)を武装させていた86歳のズビグニュー・ブレジンスキーが、『ザ・シンプソンズ』(アメリカのアニメ映画)の“ミスター・バーズ”をもっと恐ろしくしたような形で再登場している。彼のアフガンでの政策はたいへん成功して、アルカーイダを生み出した。だから、ロシアについて彼の忠告に従うことに何の間違ひがあるのか？

彼らの中には、“ロシア専門家”のより若い世代がいる。彼らはたいてい、学究時代にはロシアまたはスラブ問題を専攻したが、イスラム問題に関心を奪われた西洋では、この地域が周辺のトピックになっていくにつれて、長い間、存在を無視されてきた人々である。

突然の(おそらくは一時的な)ウクライナへの関心の一つの結果として、彼らは虚空から取り出され、自分が生涯をかけて手に入れようとしてきた瞬間から、乳を搾り取ろうと決意している。名もないウェブサイトに掲載していた、これまで忘れられていた作家たちが、突然、新しい“人食い鬼”物語に合うようにプーチンを悪魔化する、大きな雑誌のカバー・ストーリーを書くように求められ、一斉に浮かれ騒いでいる。

しかし、西側の人気あるメディアが *mea culpa* の瞬間に徐々に近づき、編集者たちが、間違った馬を支持することは、一時は配当金が多かろうと、結局は前よりも貧乏になってしまうことに気づくにつれて、彼らの小さな宴会のラスト・オーダーの時間が近づきつつあるように思える。